

牛石遺跡と土偶

都留市内で発見される多くの遺跡の中には、紀元前 14,000～300 の日本先史時代の縄文人のものがああります。

都留にあるこの時代の多く遺跡の 1 つは、桂川と大幡川の合流する厚原（あつはら）周辺に、直径 50m のリング状の配石遺構がある牛石遺跡です。この種の遺跡は、ここが東日本で発見された中で最大級のもです。牛石は、およそ 5000 年前、気候が寒冷で、富士山が非常に活発であった時代までさかのぼります。遺跡のリングは富士山のほとんど見えない場所にあります。それで、このリング状の配石遺構には宗教的な意味があり、富士山の噴火からの保護を祈るために使われたのではないかと示唆されています。

この時代のもう一つの重要な出土品は、小形山の中谷遺跡で発掘された耳飾りの人間粘土像です。それはハート型の顔を特徴とし、その全体の表面は赤い顔料で覆われています。この土偶は、その耳飾りをしているということで特に有名です。耳飾りは、それを制作した人々の習慣を探る手掛かりを与えてくれます。